



発行:NAED 一般社団法人地域づくり支援機構 発行日:2019 年 11 月 1 日

- ◇地域 P&C 活動事例研究交流会 開催報告
- ◇山添村の自立のむらづくり 16 年の軌跡 奥谷和夫(地域 P&C 塾第 2 期生)……2 頁
- ◇地域資源を活かす植物物語 野崎和生(地域 P&C 塾第 3 期生)……4 頁
- ◇世代を超えた発表・交流の機会を奈良で 市川剛司(地域 P&C 塾第 8 期生)……5 頁
- ◇地域 P&C 養成塾「現地研修レポート」 地域 P&C 第 12 期養成塾生……5 頁

地域 P&C 活動事例研究交流会 開催報告

神剛司(理事/第 12 期地域 P&C 塾塾長/地域 P&C 塾第 3 期生)



10 月 26 日、地域づくり支援機構は、地域 P&C 活動事例研究交流会を開催いたしました。当機構は開設以来、100 名を超える地域 P&C を世に輩出という実績をつくる一方で、地域 P&C の活動を紹介する NAED 通信(季刊)だけでは、拡大する会員相互の情報交流の仕組みとして不十分さを感じているところでした。そこで今回、実際に活動されている地域 P&C ご本人から日頃の活動を紹介いただき、情報を共有するとともに、地域 P&C の役割を確認し合うために、

本会を開催する運びとなりました。以下のとおり、報告いたします。

- ①日 時 2019 年 10 月 26 日(土)10:30～16:50
- ②会 場 奈良県社会福祉総合センター 5F 研修室 A 懇親会:元気うねび店
- ③主 催 一般社団法人地域づくり支援機構
- ④後 援 奈良フェニックス大学
- ⑤参加者 研究交流会 34 名(NAED 会員 27 名、奈良フェニックス大学受講生 6 名、行政 1 名) 懇親会 18 名
- ⑥プログラム

SQ	タイトル	発表者(敬称略)	備考
1	【特別講義】生物多様性と地域環境の保全	笹野義一	地域 P&C 塾第 2 期生
2	里山保全と NPO 活動について	村上秀夫	地域 P&C 塾第 4 期生
3	地域資源を活かす植物物語	野崎和生	地域 P&C 塾第 3 期生
4	地域公共人材と“地賛地唱”	市川剛司	地域 P&C 塾第 8 期生
5	山添村の自立のむらづくり 16 年の軌跡	奥谷和夫	地域 P&C 塾第 2 期生
6	空き家問題に「関係人口」で課題解決を試み	野崎弘之	地域 P&C 塾第 9 期生
7	奈良の隠れた「？」を探そう！！	高田直裕	地域 P&C 第 12 期養成塾生
8	山添村のおばあさんといっしょ ～山添村にある、昔ながらの手しごと体験プログラム～	中窪晋也 宮下和之	地域 P&C 第 12 期養成塾生

最後に、村田理事長から、「当機構での学びが実際の地域づくり活動に活かされていることに感謝します」と、お礼の言葉がありました。また、地域づくりを進めるにあたって、「子ども連れ、年配の女性グループなどが、どのような手段で、何ヵ所を回る事ができるのか、6～8 時間をそこで遊べるのかという視点で考えることの重要性」や「最大の地域資源は人である」という言葉をいただきました。

なお、開催にあたり、村田理事長、堀越事務局長には的確なアドバイスならびに多大なるご支援をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

山添村の自立のむらづくり 16 年の軌跡

奥谷和夫(地域 P&C 塾第 2 期生)

はじめに

「えーとこですなあ、ホンマにええとこですなあ、何も無いのが」、そんなフレーズで漫才師が笑いをとる村が山添村です。

村の転機となったのが「平成の大合併」。隣接の月ヶ瀬村や都祁村が奈良市との合併を決断する中で、村は住民投票を行い、市町村合併をせず「自立のむらづくり」を選択しました。

でも、財政的に裕福だったわけではありません。村の財政の半分は地方交付税に頼っている村。そんな村が独自でやっていけるのか。合併の是非にかかわらず、村民は不安をもっていました。

1. 平成の大合併と山添村の自立のむらづくり

村が最初にやったことは、村長の給料 2 割カット、村議定数 14 から 10 へ。村の各種団体への補助金カット。しかし、こんなことばかりやっていたら元気がでません。

村内の有志が集まり「内発的開発・発展を考える会」をつくり会合を重ねました。

そうは言っても、具体的なアイデアがあるわけではありません。とりあえずは、よそのマネをするところからはじめました。徳島県上勝町の「彩り産業」は、本村にも勇気を与える取り組みでした。北海道美瑛町は、ある写真がきっかけで、その場所に行きたいという観光客が年間 30 万人も訪れていました。この写真家が山添村の写真もたくさん撮っていたのです。結局、村に住んでいる人が、村の良さを知らないのではないか。そこから、「お宝さがし」「あるものさがし」をはじめました。

地域の簡単な地図をつくり、地元の方に案内してもらいながら、気づいたことを書き込む。それを地図に落とし、きれいな地図に仕上げる。その地図を使って村内外の方をガイドする。こういったことを繰り返しました。

2. 地域資源の掘り起こしと地域資源を活かした観光

こうした活動でお世話になったのが、奈良県立大学の麻生ゼミでした。村内の観光地での来訪者アンケートや村民の意識調査。村内でのモニターツアー実施や「山添弁当」の開発などの取り組みです。奈良教育大学は、アウトキャンパススタディとして、村内のお茶や羊の加工商品の活用に取り組んでくれました。こうした大学との連携は今も続いています。

具体的な活動としては、地域資源の掘り起こしです。村民は「何も無い村」と思っていました。都市の周辺部にありながら都会らしいものがほとんどない、日本の田舎の原風景が残っている、関西で随一の縄文遺跡がある、イワクラと呼ばれる巨石がある、石仏がたくさんあり石仏めぐの本には村内の 3 コースが紹介されている、こんなことが次々とわかってきました。

こうした調査を踏まえ、地域資源を活かした観光、観光と結んだ農業を通じて地域の農産物や地域資源をお金に換える仕組みをつくり、村民の暮らしが成立つようにし、「自立のむらづくり」を実現する、こういった方向が見えてきました。

2005 年には観光ボランティアの会が結成され、ガイド活動を始めました。2007 年には、県の「宿泊観光を促す地域の魅力づくり事業」に応募し、「山添村のような何も無い村に応募するのは珍しい」と、100 万円の補助金をいただきました。

昭和 30 年代、山添村では紅茶生産が盛んでした。この紅茶が 1957 年、ロンドンで行われた紅茶コンテストで世界一に選ばれました。紅茶は農産物の輸入自由化で廃れてしまったのですが、この紅茶を再生しようという取り組みが始まりました。これが「かすががーでん」の取り組みです。この取り組みは、2016 年の「ディスカバー農山村(むら)の宝」として首相官邸で表彰されるなど、「むらづくり」でも大きな成果を挙げてきました。

観光ボランティアガイド活動では、年間 1,000 人を超える観光客をガイド、全国から、世界から観光客が訪れています。また、お茶揉み体験や山菜狩り、タケノコ掘り、レンコン掘り、ブルーベリー狩りなどの体験型観光も進めてきました。

3. フォレストパーク神野山での取り組み

山添村の最高峰が神野山。この山は、ツツジの名所として知られ、月ヶ瀬と合わせて県立自然公園に指定さ

れています。この神野山の新たな魅力を掘り起こして、これを観光に活かす取組みが進んでいます。

ひとつは、「めえめえ牧場」の羊を活用した取組みです。この羊は夏に出稼ぎし、学校や公園などの除草に大活躍。また「羊と遊ぶ、羊を食す」という「ひつじ祭り」も行っています。春には仔羊がたくさん生まれます。これをお披露目する「おひろめえー会」、毛刈り体験、夜の羊の生態を見る「ナイトシープ」など、羊を使った多角的な取組みが実施されています。

天空のレストラン「映山紅」もリニューアル。「眺望のいいレストラン」に応募したものの落選。県からのサポートもあり、窓を全面ぶちぬき、薪ストーブを設置。フレンチのシェフを迎え、料理も地元食材にこだわった和食料理と合わせ、土日のビュッフェランチ。夜は完全予約制のフレンチも提供するようになりました。

神野山のもうひとつの売りは、関西有数の星空スポットであるということです。これが観光資源になるとは、当初思いつきませんでした。数年前、JAF 関係の団体が、ペルセウス座流星群観望会をしたいとのことで、その準備やガイドをさせていただきました。その団体は午後9時に帰られたのですが、その後も数千人の観光客が訪れ、夜中の2時まで交通整理に追われました。その後、これをイベント化し、駐車料金をいただくこと、夜のレストランやキッチンカーの営業を始めました。

4. 都市と農村を結んで「岩屋いなか市」

山添村には、たくさんの空き校舎があります。これを活用して、都市と農村を結んだ取組みも始めました。村のほとんどが兼業農家で、野菜などを作っていますが、できすぎて余ります。近所におすそ分けをすると、近所もお返しをとなります。これが精神的な負担となっていました。余ったものの有効活用をと、旧東豊小学校で「岩屋いなか市」を始めました。それには300人ほどが参加。その多くが三重県名張市の梅が丘団地の方たちでした。何回か続けているうちに、「うちの団地で出張販売をしてもらえないか」という声が出てきました。それで、月1回、団地の真ん中の広場で販売するようになりました。「岩屋いなか市」で、お年寄りが元気になりました。「売り上げは孫の小遣いに」と、80歳を超えるおばあちゃんたちの生きがいとなり、デイサービスのよう役割を果たすようにもなりました。この取組みは、「第4回ゆめづくりまちづくり賞」優秀賞を受賞することになりました。

5. 自立のむらづくり16年の現状と課題

いま山添村は、県下でも先進的でユニークな村へと変化してきています。住民検診を充実し、予防、早期発見、早期治療など地域医療の取組みを行っています。20歳までの子どもの医療費を無料化し、奈良県一低い高齢者の医療費を実現しています。また、村立高校の分校をもち、耐震工事や各教室へのエアコン設置、トイレの洋式化などにいち早く取組んできました。

財政が決して豊かでない中でも、こうした施策を実現するとともに、役場庁舎の建て替えも終わっています。住民投票時に54億円あった一般会計の起債残高も22億円にまで減り、基金は14億円までになっており、財政上も問題ない水準です。

県は「奈良モデル」と称して、「広域化」を推進しています。後期高齢者医療、消防、ごみ、国保、さらに水道まで「広域化」を進めています。市町村合併が進まなかった奈良県だから、小さな自治体を助けるという名目でこれが実施されています。村では消防費などが新たに大きな負担となっています。

医療水準の平準化は置いたまま、国保税のみを県下一本化する、そのことによって、これまで安かった国保税を大幅に引き上げる、小さい自治体が独自の工夫をして効率的な運営をしてきたものにまで「奈良モデル」を押しつける、結果として、地方自治を破壊するという、とんでもないことが進められています。

おわりに

いま人口が減り、村内の商店やペンションが廃業するという問題も起こっています。しかし、もう一方で明るい話題も豊富です。年末までに、古民家を改修して農村ホテルが開業、また、NPO法人がゲストハウスを開業する予定です。4月以後、旅行会社とタイアップし、数百人の外国人観光客を迎えています。

過疎の村ですが、村に住みたいという若者も増え、村内に新しい活気を与えています。これまでバラバラに取組まれていた「むらづくり」の活動がつながり、新しい大きな流れとなりつつあります。みなさんの来訪をお待ちしております。

地域資源を活かす植物物語

野崎和生(地域P&C 塾第3期生)

地域P&C 活動事例研究交流会において、「地域資源を活かす植物物語」と題したテーマで発表するにあたり、県下市町村が制定している花木をホームページなどで調べました。

その結果、それらの花木が制定された経緯を紹介していない市町村が多く見られましたが、奈良市花である「奈良の八重桜」のように経緯を紹介するまでもないほど、有名なものもありますが、経緯を知ってその町の歴史に思いをはせたりすることができるもの、地域の山野を想像させるものなどがある一方、「？」と感じさせる市町村もありました。

以下に私が興味をもった市町村花を、私見(※印)を交え、概要を紹介します。

- ①コスモス<大和高田市、川西町> 大和高田市:2000年4月市民投票によって決定。川西町:説明なし
- ②ウメ<天理市> 説明なし(天理教の梅鉢からか※)
- ③クチナシ<橿原市> この花は、古代、耳成山に群生していたと伝えられています。
- ④キキョウ<五條市> 1982(昭和57)年、市政25周年の記念として公募のうえ制定。古くから観賞用や薬用として栽培されてきた。
- ⑤ツツジ<御所市、山添村、曾爾村、高取町> 御所市:葛城高原のツツジ群落からか※、山添村:神野山がツツジの名所であるからか※、曾爾村:説明なし(ホームページの写真はヤマツツジ)、高取町:説明なし
- ⑥スマレ<香芝市> 1985(昭和60)年制定。誠実という花言葉をもつスマレは、日本古来より野山に咲く身近な花として愛されてきました。「春の野に すみれ摘みにと 来しわれそ 野をなつかしみ 一夜寝にける」(山部赤人)。古歌にも、その可憐な精一杯生きようとする姿が謳われている。奈良市古市町にこの歌の歌碑があり、香芝市と山辺赤人の関係は調べられなかった※。
- ⑦ナデシコ<安堵町> 江戸時代より、キクやサクラソウ、ハナショウブ、ナデシコの栽培が盛んであり、安堵町でもたくさんのナデシコが咲いていた。
- ⑧ツバキ・サザンカ<斑鳩町> 聖徳太子が西暦596年に伊予の温泉(道後温泉)に入った時、ツバキの木が覆い重なって美しかったと詠まれています。同時に、聖徳太子は、「日月は上にあって、すべてのものを平等に照らして私事をしない」と詠まれています。太陽は万民に平等に与えられるものだという人間平等主義の思想は、古代ではありえないような新しい思想であったと言われていました。また、古くから法隆寺で行われる「散華(さんげ)」と呼ばれる法要にツバキが多く用いられており、今もその習慣が残っています。町の花ツバキを生かしたまちづくりに植樹を進めます。サザンカについては説明なし
- ⑨ヒマワリ<三郷町・広陵町> 両町とも説明なし
- ⑩テイカカズラ<安堵町> 安堵町の出身である、近代陶芸の巨匠 人間国宝 富本憲吉氏が最も愛した花と言われている。
- ⑪スイセン<田原本町> 1986(昭和61)年9月25日制定。説明なし
- ⑫アザサ(スイレンに似た浮葉植物)<三宅町> 2009年10月に町花に制定。将来的に絶滅する危険性があると判断される準絶滅危惧種にも指定され、万葉集に三宅の原の花として詠まれている歴史的な背景から
- ⑬タチバナ<明日香村> 1976(昭和51)年11月20日制定。聖徳太子(厩所皇子)が産まれた橘寺にちなむものか※
- ⑭ユリ(ササユリ)<上牧町> 町の象徴ともいえるササユリは、かつて町内に数多く自生。現在は、町民の手で再生の取り組みがなされている。
- ⑮サツキ<王寺町> コミュニティづくりとしての生活環境の中にとけこみやすい花、そして、王寺町の 明神山にも群生(サツキはこの地域に自生しないはず※)しているとの理由で町の花として選定されました。
- ⑯フクジュソウ<河合町> 説明なし
- ⑰ナシの花<大淀町> 1991(平成3)年に指定。明治中期より大阿太高原一帯で二十世紀ナシを中心に種々のナシが栽培され、大淀町の代表的な特産物として全国的に知られ、またナシの花は、春にその白い花をナシ山一面に咲かせ、見る人を楽しませてくれている。
- ⑱マツバボタン<下市町> 1974(昭和49)年11月1日制定。いちど植えると年ごとに増えていく縁起のよい花
- ⑲オオヤマレンゲ<天川村> 説明なし。天然記念物・絶滅寸前種であるオオヤマレンゲからか※

⑩シヤクナゲ<十津川村・野迫川村> 説明なし

⑪カワツツジ(カワサツキ)<下北山村> 説明の記載はないものの、村政 100 周年を記念して村民からの応募があった中から、選考委員会(私も委員の一人)で村内の河川の岩を彩るツツジを選んだ。

⑫ヤマユリ<上北山村> 詳細説明なし

⑬ヤマブキ<川上村> 毎年 4 月頃になると、黄金色の花が一斉に咲き乱れ、まばゆいばかりのあでやかさで、道ゆく人の目を楽しませてくれ、俳人芭蕉の読んだ句「ほろほると 山吹散るか 滝の音」にちなむ。

各市町村とも、シンボルとして制定したものですから、まちづくりに活用してほしいものです。

世代を超えた発表・交流の機会を奈良で

市川 剛司(地域 P&C 塾第 8 期生)

私は、春日大社など厳かな風景が似合う奈良のまちが大好きです。大好きな奈良で行われている、地域プランナー・コーディネータ養成塾で様々なことを学びました。特にプレゼンテーションの時間が好きでした。

2019 年 10 月 26 日(土)の地域 P&C 活動事例研究交流会では、いろいろな発表を聞かせてもらう機会に恵まれ、自分だけでは知ることができなかったジャンルの情報を得ることができました。貴重な情報交換の場でした。

また、発表を聞いてくださった方の中にも素敵な研究テーマをもたれる方がいらっしやっと思えます。ぜひ、皆さまの近くの場所で、気軽なプレゼンテーションの場を開き、いろいろと発表していきましょう。やり方がわからない場合は、ご相談いただければお手伝い致します。いま私が注目しているのは山添村です。

大阪市地域公共人材第 1 期生としても活動しており、地縁団体の会議の場においてファシリテーションなどを実践しています。「地賛地唱」というタイトルで、地域の魅力を歌にしています。取扱説明書づくりから、ファシリテーション、作詞・作曲、草むしりまで幅広く対応いたします。お気軽にお問合せください。

地域 P&C 養成塾「現地研修レポート」

1. 今井町 実施日:2019 年 9 月 7 日(土)~8 日(日)

宮下和之(地域 P&C 第 12 期養成塾生)

(1)現地下見と打合せを兼ねて、今井町灯火会の準備(8 月 9 日)に参加

午前中に、地域の方々と一緒に灯火会の看板灯を 2 ヲ所に設置し、たくさんある行燈の骨組みなどを運び出す作業をお手伝いした。1 日だけのイベントの開催に向けて、事前に何日もかけて準備を行う。地域の若手の手伝いがなかなか集まらない、担い手の高齢化、世代間の引き継ぎ、準備の人手が課題とのことであった。

午後は大きな行燈づくりを行った。長半紙に筆で自分の思いを書くのだが、なかなか言葉が浮かばず、とても苦勞した。しかし、この大行燈づくりがとても深く心に残っている。今井町の外から関わる人が、自分の心の中を見つめ言葉にする作業は、とても意義深いと感じた。さらに、それを「筆で書く」という作業も、書道の心得が全くない自分にとってはチャレンジを求められる非日常の体験となった。私のような人はたくさんいるだろう。

ただ手伝ってもらいたい作業を用意するだけでなく、参加者の思いや言葉を、行事の中に取り込む仕掛けがあり、それが非日常的で、決して難しくないが、参加者にチャレンジを求めるものであれば、より印象に残る思い出になり、それだけで一緒に作り上げる仲間になれる。こんなやり方の「人を巻き込む仕掛け」は、自分も意識して取り入れたい。

(2)今井町の町並み

1 日目の午前中は、今井町を歩きながら、今井町の歴史や町並み保存の取組みについて学んだ。ゴミがほとんど落ちていないきれいな町並みや、人が安全に歩き・走り回れる路地、町中での車のドライバーとの譲り合い等は、長い活動の積み重ねの上にできたものであることを知った。

現在は、今井町の町家が貴重なものと認識されているが、そうでなかった過去から現在に至るまでには、地域の周辺整備や政策の変化に振り回されたという苦勞話もあった。私自身、時に公共事業に関わる立場にあるが、

自分が下す統一基準による機械的な評価は、果たしてその地域の暮らしや思いと乖離していたりはしないかと、身につまされる瞬間があった。

かつての今井町の自治と町屋のつくり、水路のつくり、町家に残る馬や牛を繋ぐ金具とその理由、昔ながらの伝統行事を伝承や、地域の新たな取組みへの工夫などが印象に残った。特に、今井宗久発祥の地であり、全国の有力者と繋がりがあった町であること、福井藩の屋台骨を支え続けたこと等に代表されるように、日本の他の地域を支えた経済力を備えていたこと、明治維新後には、自分たちが経済的に疲弊する状況にあったにもかかわらず高野山の復興に尽力するなど、経済人として他の地域を支え、社会に貢献する精神が町として根づいていたことなどが、とても印象的であった。一級の町であり、その歴史の上に立つ「町並み保存活動に対する思い」のスケールの大きさを感じた。

(3)夕食バーベキュー

夜は、若林邸の中庭でバーベキューを囲んだ。塾生で今回のリーダーの中窪君が用意してくれた、山添村の野菜(タマネギ、カボチャ、トウモロコシ、ナス)は本当に美味しかった。猪肉、伊賀牛も美味しかった。また、若林さんの明日香の米も美味しく、こういう新鮮で良質な食材に囲まれた時、豊かさを感じる。

一方でバーベキューに参加する人数が予定の半数で、結果的に食材が大変多く残る結果となり、予算もオーバーした。参加者の出席・欠席の連絡・確認には配慮が必要だと感じた。残念だった。

(4)町家再生の体験

町家再生の作業では、壁土の中塗りを行った。土を練り、壁を霧で湿らせ、土を塗る。汗だくになりながら黙々と作業を体験した。私は初めての経験ではなかったが、自分でやってみることで、職人さんの技の凄さや、道具の使い方と壁土塗りの難しさを身をもって実感した。なかなか平らにムラなく塗れないし、とくに右下の隅の壁土塗りは難しかった。

この体験を通してとても参考になったのは、この町家再生の取組みは、自分たちのような初心者が昔ながらの建築技術を体験し学ぶ場であると同時に、プロの職人にとっても、技術の伝承の場であり、かつ対外的にも実績が積める場として、きちんと位置づけられている点である。新聞を使って、職人さんとその実績をしっかりPRする支援(心配り)も行われていた。

今井町での町家再生に係わることが職人さんの対外的な実績となり得るのは、今井町の町屋が全国的に価値があるものとして認知されており、そこでの実績が世間で高く評価されるからである。だからこそ、技術の伝承の場としても機能する。まちづくりに取り組む者は、その価値をきちんと見つけ、認識し、しっかりと伝える姿勢が大切だと学んだ。



読売新聞 2019年9月17日

中島由美子(地域P&C 第12期養成塾生)

当日は、業務のため、残念ながら午後3時からの参加でしたが、古民家再生修復作業の現場に到着した瞬間に感じたことは、第1回目の開講日から随分と作業が進み、古民家に命が吹き込まれていっていると言う感覚と、そこに至る関わる人たちのうごめく思いや、注がれたエネルギーと光景が、自分のからだに吸収されていき自分自身のエネルギーになっていく快感という感覚でした。

歴史的な工法や、模索しながら工夫を伝承された多くの民の暮らしを伝えたい自分の気持ちと、それを実際に汗して創り上げる情熱に共感し、応援したい自分の気持ちがいただいたエネルギーで内面的なエネルギーから行動するエネルギーに変化する自分の社会経験値の進化を得ることができました。また、玄人職人の左官作業を間近で拝見し、ものづくりの楽しさと難しさを再確認しました。

夕方からは若林邸での夕食準備の買い出しに中窪さんと出かけました。今のまちの環境を見て、まちの暮らしの過去と現在を往復した時間でもありました。中窪さんのご自慢の山添村産物(野菜、猪肉)と炭火をおこしていく、まさに命をつないできた炎の灯りの中で膝を交えて、若林講師からの貴重な人生回顧録を聞き、その時代光景や近代歴史、日本の地理など自然科学の楽しさを再確認できました。若林講師のような語り部との交流が、次の世代に疑似体験をとおした「大切」とは何か、自分の価値する物差しを増やすことの重要性など、それぞれの自分を再確認して継承する、行動をおこす創造性を養うこととなる。今後、交流人口や関係人口を増やして、真の人間の進化や地域の進化につなげていきたいです。

最後になりましたが、ご自宅を提供していただきました若林ご夫妻に感謝を申し上げます。

中窪晋也(地域P&C 第12期養成塾生)

「大和の金は今井に七分」、こう説明くださった若林さんの紹介のもと、7日8時に若林さんの自宅へ集合し、研修が始まりました。

午前中、若林さんの現在に至るまでの人生、町おこしの経緯を聞いた時、自身の考えと行動で現在の今井町の情景が形づくられたものであることの大変さを感じ取ることができました。また、一介のサラリーマンながら、臆することなく地域活動に邁進されてきたお話には、私の今後の姿勢を正していくことが重要であるという参考として聞かせていただきました。

お話を聞いた後、実際に風情のある今井町の町中を一つひとつ若林さんから説明を受けながら散策した時に感じ取ったことは、やはり地域との交流の厚さであったと思います。狭い道であるからこそ、車が通るのであっても会釈を交わせる関係性がこの町には根づいており、個々の繋がりがこの町全体を形成しているのであって、ここを訪れた人たちは皆、町の温かさや、優しさに触れられることが一番の楽しみではないかと思います。また、徹底して受け継がれている風景を残さんと、木造建築や電信柱を地中に埋めるなど、きめ細かな町づくりの姿勢には、若林さんの説明を受けさらに感動しました。そして説明いただいたからこそ気づけた町づくりの苦労や努力も知り得ることができて良かったです。

午後からは、古民家再生で、暑い中ではありましたが、壁塗りに参加させていただくことができました。「町づくりとはこういうことや、実践が大事」と若林さんが仰られるとおり、少しの作業でもとんでもない苦労が伴う、しかしそれなくして発信はできないですし、経験してからの発言には言葉の重みが違ってくることを意味を汲むことができたように思います。1時間以上かけて歪な壁塗りを塾生皆でやった後、専門の左官屋さんがわずか5分で見事な壁に塗りなおしてくださった時は感服しかありませんでした。

夕食では自分の村から持って行った野菜や獅子肉を皆さんに美味しいと言ってたべてもらい、これも地域活動の一端になっているとお言葉で、行動一つひとつ意味が成されることの重要性を知る良い1日になったと思います。

今日のことを実際に自分の地域で活かせるよう、頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

高田直裕(地域P&C 第12期養成塾生)

9月7日・8日の2日間、今井町の研修に参加しました。若林さんの案内で今井町を散策した時に、印象に残ったのは、「今井町は室町時代からあった」ということです。現在、今井町に立ち並ぶ美しい民家は、江戸時代の伝統様式を保っていますが、今井町の歴史を聞くと、今井の地に「今井道場(称念寺)」を造った今井浄欽、現在の今井町の町割りを行った今井豊寿によって、室町時代から今井町が始まったことを知りました。

また、戦国時代に起こった石山合戦で本願寺側にいた今井が、織田信長から降伏するよう命じられ、津田宗及や明智光秀の助け舟によって、今井は降伏し信長に許され滅ぼされずに済んだストーリーがあったこと、千利休と津田宗及とともに天下三宗匠である今井宗久が出身であったこと、民家の外壁の上にあった鉄の輪っかは、牛を繋げる輪っかで、下の鉄の輪っかは、馬を繋げる輪っかとして、今も置いてあり、現在の今井町のマークになっていることを知りました。案内がなければ、今井町に立ち並ぶ美しい町並みを眺めるだけで終わっていたと思います。いろいろ聞いて良かったです。

昼食後、古民家の土壁を塗る作業をした。最初は、土が意外にも重く、塗ってもほとんどの土が下に落ち、難しかったです。途中から塗り方の指導を受けて、だんだんと慣れることができました。2日間かけて、この作業を行ったので、体力的に大変でしたが、とても良い経験をしたと思いました。

最後に、今井町の案内所で販売されていた漫画「今井町発展の礎を築いた男 今井兵部 物語」を購入しました。とてもわかりやすく良かったです。

2. 室生深野 実施日:2019年9月28日(土)

宮下和之(地域P&C 第12期養成塾生)

(1)現地実習

午前中は、深野の現地を歩きながら説明を受けた。深野から名張市街を見下ろす風景は、周囲を山々に囲まれた中に、室町時代に建立された神明神社と鎮守の森が鎮座し、里山の棚田風景が広がり、視野が開けていてとても美しかった。日本の里100選に選ばれたことは頷ける。

里の上部に位置する「棚田の宿 ささゆり庵」は、とても上手に古民家が再生されていて、外国人の観光客が多いとのことであった。日本人から見てもオシャレな空間が創出されていた。しかし、深野の里山の風景がきれいに維持されていることが、何よりこの場所の価値を高めている。

こうした景観を維持するため、地域の人によって田畑や周囲の斜面がとてもきれいに草刈りされていた。地域の方が景観を守るため、競って草刈りを行う雰囲気にあるということであった。なかなか例のないことではないかと思う。こんなふうには地域の意識が醸成され、ずっと続いていることが、とてもすばらしいと思った。

深野に入る道路の境界には、勧請縄が張られており、小正月の土・日に村で取りつけるとのことで、伝統的な行事も伝承されていた。日本の里100選の眺望点付近の斜面には、周囲から移植されたササユリが大切に保全され、深野から見下ろす風景とササユリが、両方楽しめるように演出されている。ササユリは、一本々々すべての個体について、草丈や開花状況が毎年モニタリングされ、きちんとデータを蓄積しながら適切な維持管理が行われており、地道な活動に感銘を受けた。

(2)深野〇〇会の取組み

深野地区は、もともと昔から、住人同士が互いに助け合って生活する雰囲気のある村だったとのことであった。葬儀で家を留守にすると、隣家の人が留守中にお風呂を入れてくれているといったエピソードが紹介された。30年前頃から、互いにプライバシーには立ち入らないという風潮の変化がみられ、人口が減り始め、付き合いが希薄になることへの危機感から、深野〇〇会が発足した。

深野〇〇会が発足した当初は、当時の高齢の方からは、よそ者を受け入れることに対する拒否感があったとのことで、粘り強く話し合いを続けることで同意を得ていった。また外から来た人に対しては、村人からの声かけ・挨拶を行うことで、新たなコミュニティの構築が図られた。

村の行事は、年間行事に見える化することで、地域でしっかり情報共有が図られた。行事は楽しさを優先し、強制や負担を強いることがないように、時には慣習を変えるなどの工夫が行われた。例えば、秋祭りは、以前は担当者が固定されていたが、負担を軽減するため全員参加に変更された。地域の素朴な資源をより良く活用する工夫と言える。

他の地域がやっていないことに、失敗を恐れず積極的にチャレンジするという姿勢にとっても感服させられた。全ての地域に名所となる文化財や資源があるわけではない。しかし、各地域でそれに代わるものを創ることができるといふ姿勢と信念、ササユリの保全活動、ホームステイの受入れ、日本の里100選への応募、福井県小浜市の茅の栽培への協力などがあり、こうした地域活動が社会的に評価されることが、地域の誇りに繋がり、活動のモチベーション向上に寄与したとされる。とても大切な点だと感じたと同時に、地域をあげて新しいことにチャレンジするための、地域の合意形成には、どれほどの努力とエネルギーを要したのかと、その重みを想像した。

小浜市の茅刈のボランティア支援では、マスコミに取り上げてもらうように働きかけることにより、深野〇〇会に関わるのが切っ掛けとなって、福井県をあげての取組みに発展した。マスコミをしっかり巻き込むことも、前回の今井の町家再生と共通していて、改めてそうした視点の大切さを認識した。

深野〇〇会の活動は、収益は考えない、ボランティアでの取組みとして実施されてきた。当初は、収益を検討することも頭をよぎったが、恩恵を受ける人と受けられない人とで差が出るので良くないという声があり、ボランティアで取組んだとされる。結果的には、それが良かったと考えているとのことであった。一方で、地域にお金が落ちていないことが課題という認識もあった。皆で取組むのはボランティア活動で、収益事業は個別の就労支援があっても良いのでは、との意見があった。この点は、私も考えたい。

中島由美子(地域 P&C 第 12 期養成塾生)

深野〇〇会の北森講師から多岐にわたる体験談や後世に伝える思い、多くの他機関との連携や取り組み、また、土地利用と開発や施設誘致など、懇親会を含めて、深野の 1 日の自然の移り変わりも実感・体得できる研修でした。

32 年の歳月をかけて、そしてこれからも継続する活動、「深野〇〇会」は、名称を定めるのではなく、行動を起こすことが大切という教えを表現された代名詞となっていることが印象深く、32 年を振り返りながらの地区案内と解説、講義をいただくことで関わる方々の成長と会の醸成が、自分のことのように想像・疑似体験できました。

2016 年度奈良県シニア地域貢献活動実践者養成講座を受講した際、北森講師の講義もあり「新しい田舎の時代」づくりを、ささゆり庵ができたことを含めて情熱的に講義されていた光景は今も色濃く記憶しています。パッション性の高さが伝達効果を大きくすることは、当時から理解したことですが、今回もやはり関わる方々の思いと情熱、発信する行動力、行動するにあたっての共感者とのめぐり逢いと相互のエンパワメントが大切と改めて実感できました。

先駆者の実績を学びながら、今後の自分の事業計画に反映させていきたいです。そして共感者の一人に加えていただきたい気持ちや、相互の協力関係を築いていけたらとも思いました。成長し合う喜びを分かち合える仲間が宇陀にもいることが、嬉しいお土産になりました。

経済的なことをどう展開していくかは一つの課題にも映りました。全て、ボランティア精神は尊いですが、経済循環型の事業化の課題、どこかに停滞・留保されることのない公平な仕組みづくりを深く掘り下げていく必要があるとも感じました。自然破壊にならない自然との共存スタイルをもう一步考えてみたいです。

多くのご苦労と喜びを疑似体験させていただき、ありがとうございました。

中窪晋也(地域 P&C 第 12 期養成塾生)

研修を通じて、最も印象に残ったことは、北森さんの話であった。中でも、地域づくりをする上で、ガードレール磨きから始めるといった、自分ができることから考えて、小さなことをおろそかにせずスタートしたひたむきさに感動をした。

また、深野全体で、一丸となって活動するうえで、「地域の決まりごと」を書面におこし、どの人にとっても(例えば新しく転入した人)、共通認識ができるようにしたことも印象的であった。地域全体の語弊や誤解といったリスクが生じることをマネジメントするうえで有効な手法と感じた。

その決まりごとによって、出合い等で草刈りが実施され、深野全体の景観が保っている背景を知ることができ、意識に高さで長期間持続していることに感嘆した。

このことより、地域の方の意見を尊重することや、外国人の受入れやコンペティション等に応募といった新しいことにチャレンジするという行動力が、地域づくりに必要であると思った。

古くからの伝統行事に関しても、伝統を踏襲しつつも、現代で実施するうえで無理のない形に変えていき、楽しく、伝統行事が持続的に行えるように、意識改革していた。このことも、長期間持続した活動を行ううえで必要なものと思った。

今後、自分自身が活動するに際しても、何事もチャレンジしていく姿勢で取組んでいきたい。あらゆる手段を用いて発信し、地域の存在を認識してもらいたいと思う。「地域の決まりごと」のような、ルールを設定することで、関わる人々が共通した認識や目的をもちながら行動ができるようになる、持続性をつくっていく手段であることを学んだ。

高田直裕(地域 P&C 第 12 期養成塾生)

桜井市から車で 45 分。宇陀市深野に到着して、まず気になったことは、集合場所の神明神社の横壁に「逆さまになっている鯉」が描かれていたことです。聞くと、昔から書かれている絵で、今でもきれいに修復して残していることがわかりました。

北森さんの案内で、深野を 2 時間くらい散策しました。昔よく見たササユリが少なくなっている現状と苦労話を知ることができました。また、自然豊かな場所に 2 軒の民宿があり、そこに海外からお客様が来られ宿泊していることや、トビがあちらこちらに飛んでいること、ビオトープもあることにも驚きました。

午後からの講義では、よそ者を積極的に迎える心と姿勢を育むこと、続ける・楽しむ・自由な参加を重視するこ

との大切さがとても印象に残りました。

この講義を聞いて、実施するまでの最初の段階として、自身がしたいことや考えていることをざっくばらんに相手に話してから、じわじわと実施に向けて下準備をして、スタートしなければならないのではないかと考えさせられました。

外狩大樹(地域P&C 第12期養成塾生)

30年以上も前から地域活動をしている大先輩の深野〇〇会のお話を聞くことができ、とても勉強になりました。特に印象に残ったことは、全てボランティアでやってるということです。住民さんたちの結束力がないと成り立ちませんし、一筋縄ではいかないと思います。それをまとめている北森さんのリーダーシップのすごさを実感しました。

また、「都市との交流」という明確なテーマを設定し、奈良県立大学との交流、ビオトープ築造、炭焼き体験の窯新設、深野サミットなど、他地域との交流や新しいことをどんどん進めていく姿勢はとても大切だと思いました。

ささゆり庵は交通の便が良いとは言えない立地にも関わらず、外国人観光客が多く訪れていることに驚きました。古民家、盆栽、忍者など、外国人が好きそうな要素がたくさん詰まった、インバウンドを意識した宿泊施設になっていました。古民家を改修したり、新築で古民家風の家を建てたり、大規模な庭を造成したりと、かなりの資金を投入している様子でした。私がやりたいと考えているゲストハウスとは資金力やターゲット層が違うので、真似することはできませんが、とても勉強になりましたし、田舎型宿泊施設の可能性を感じました。

宇陀市深野地区を初めて訪れてみて、美しい棚田の風景に魅了されました。また個人的にも来たいと思っています。その時は、またよろしくお願いします。

最後に、北森さん、現地での案内、貴重なお話、本当にありがとうございました。考え方、姿勢など参考になることばかりだったので、自分の地域でどう応用できるかしっかりと考えていきたいです。地域おこし協力隊のことを気にかけてくださっていることもとても嬉しく感じました。また、いろいろと教えてください。今後ともよろしく願い致します。